

1 遷都以前の古代寺院

せんといぜんのこだいじいん

知る

古代の寺院

仏教伝来以降、各地の有力豪族たちは自分たちの精神的支柱としてその本拠地に寺院を建立します。京都においては、多くが盆地を見おろす山すそに築かれました。

一方で、遷都を果たした桓武天皇は、奈良の仏教勢力をおさえるために、平安京への寺院の移転を一切認めませんでした。平安京内には、官寺として東寺・西寺が建立されただけでした。ただ、平安京域外に遷都以前より存在していた各豪族の寺院については、これを認めました。それぞれの寺院を建立した各地の有力豪族と連携して、平安京の建設に当たるためだと思われます。

平安中期以降、それらの豪族の力が衰えていくにしたがい、信仰の源である寺院も徐々に荒廃していききました。法観寺や広隆寺など現在まで残っている寺院もありますが、その多くが衰微し、土の中に埋もれていきました。

このように、後の時代の発掘によって寺院と判明した遺構を一般的に「廃寺」と呼びます。

秦氏と北野廃寺

北野廃寺は京都盆地では最古の部類に属する寺院です。太秦から続く台地の東端に位置し、寺域は北野白梅町の交

又点を中心とした一帯になります。昭和十一（一九三六）年の市電西大路線新設工事の際に遺物が発見され、北野廃寺と命名されました。その後の調査で多数の遺構が発見されており、寺域は北野白梅町交叉点を中心に約二百メートル四方と推定されます。

現在、北野廃寺は太秦広隆寺の前身、蜂岡寺であるという説が有力です。『広隆寺縁起』によると、蜂岡寺の旧寺地は葛野郡九条河原里と荒見社里という所でした。これは平野神社（北区平野宮本町）の近辺と推測され、北野廃寺の位置と地理的に合致します。



北野廃寺跡出土の「鶴室」墨書
野器(京都市埋蔵文化財研究所
土蔵)

昭和五十二年の発掘調査では、「鶴室」の墨書のある平安前期の陶器が発見されました。「いかるが」といえば大和国斑鳩の法隆寺であり、そこから聖徳太子との関係が推測されます。『日本書紀』には秦河勝が推古天皇十一（六〇三）年に、聖徳太子より仏像を授かり蜂岡寺を造営したとあり、これが北野廃寺のことではないかと考えられています。また、「秦立」の墨書のある土器も発見されています。

一方で、北野廃寺は平安時代に入って桓武天皇によって建立された常住寺（野寺）ではないかともいわれてきました。それを裏付けるように昭和五十四年に行われた調査では、野

寺」の墨書のある平安初期の土器が発見されました。

また、北野廃寺の寺域からは古墳時代から飛鳥時代にかけての竪穴式住居跡がいくつか発見されており、寺の創建との関わりが注目されています。

栗田氏と北白川廃寺

京都盆地の東北部に位置する北白川で、昭和九(一九三四)年の土地区画整理工事の際に、古代寺院の伽藍跡が発見されました。主要な遺構として東西三十五・七メートル、南北二十二・五メートルの瓦積基壇(外側を瓦で保護した基壇)が見つかり、金堂の跡と推定されています。出土した瓦から、創建は白鳳時代(七世紀後半)、平安京遷都以降も存続した寺院と考えられています。

また、瓦に官営の窯である小野瓦窯や栗栖野瓦窯の製品が含まれているのも特徴です。これは、この寺が朝廷とのつながりが強かったことを示しています。さらに北白川から南禅寺あたりまでが古代の愛宕郡栗田郷であったことから、この寺は大化改新から奈良時代にかけて活躍した栗田氏の氏寺、栗田寺であったと思われる。

昭和四十九年から五十年にかけての調査では、白川通の西側から塔跡の正方形の基壇が新たに発見されました。両基壇の南縁がほぼ一直線上にあり、同じ種類の軒丸瓦も発見されたことから、同一の寺院の遺構であると考えられます。ただ、両基壇の距離が約八十五メートルも離れているため、同じ区域に独立して存在していた別の寺院であるとも考えられます。金堂院と塔院が並存する伽藍配置は、七世紀後半の山背北部の古代寺院の地域的特色であるという説も出ています。

榎原廃寺

榎原の地は京都盆地の南西、京都の街並みを見おろすことができる、長岡丘陵の東端に位置しています。附近には百々池古墳・天皇の杜古墳・一本松塚古墳など古墳時代の遺跡があり、古くから開発されていたことがわかります。戦前からその存在が知られていた榎原廃寺は、昭和四十二年の調査によって具体的な姿が明らかとなりました。

発見された遺構は、八角塔の瓦積基壇、中門とそれに続く回廊、東西築地(土塀)などです。中門・塔・金堂・講堂が一直線上に並ぶ四天王寺式伽藍配置と推定されています。遺物の状況から、七世紀中葉の創建と考えられ、平安時代中期には廃絶したものと思われる。



榎原廃寺八角塔模型
(京都文化博物館蔵)

注目すべきは八角塔の基壇です。八角形の一辺の長さは約五メートルあり、三重塔であったと推測されます。奈良法隆寺夢殿など八角円堂はいくつか見られますが、七世紀の八角塔の基壇は他に例がありません。なお、現存する八角塔は、長野県の安楽寺八角三重塔の一基だけです。

出土した瓦や八角塔のある特殊な伽藍配置などから見て、高句麗の影響を多く受けて建立されたものと思われる。

大宅廃寺

昭和三十三年山科東部の大宅の地で、名神高速道路の建設に伴って寺院の伽藍跡が発見されました。これまでの調査では、東西約二十七メートル、南北約十五メートルの石積基壇や、掘立柱建物、土壇状遺構などが発見されています。出土

品などから創建は白鳳時代であり、平安時代前期に全焼した後、小規模な堂が建てられたものと思われまます。

大宅廃寺は、中臣鎌足(六一四～六九)建立で奈良興福寺の前身といわれる山階寺(山階精舎)であるとする説や、平安前期の大領(郡司の長官)、宮道弥益(生没年未詳)の妻のために建てられた堂であるという説など様々ありますが、この地を地盤とする豪族、大宅氏の氏寺とする説が有力です。

出雲寺(上出雲寺)

出雲寺は上京区上御霊前通烏丸東入上御霊豎町・馬場町・相国寺門前町(上御霊神社境内附近)にあったとされる古代寺院です。この附近は古代の出雲郷であったことから、出雲氏の氏寺ともいわれています。また、延喜式七大官寺の一つ御霊寺に当たるとされています。

附近で出土した瓦や上御霊神社に保管されている瓦などから、創建は奈良時代前期と考えられます。平安時代には御霊信仰と結びついていました。金堂・講堂・食堂・鐘楼・経蔵などがあり栄えたようですが、平安後期には荒廃しました。『今昔物語集』巻第二十の中で、その荒廃の様子が語られています。

歩く/見る

京都市内のその他の廃寺遺跡

- 南春日町廃寺
- 板橋廃寺
- おつせんどつ廃寺
- 小野廃寺
- 西京区大原野南春日町
- 伏見区指物町・下板橋町・御駕籠町
- 伏見区深草鞍ヶ谷
- 伏見区醍醐大高町・片山町・古道町

御香宮廃寺

伏見区桃山町松平筑前・鍋島町・御香宮門前町

醍醐廃寺

伏見区醍醐西大路町・御霊ヶ下町

法琳寺
元屋敷廃寺

伏見区小栗栖丸山町・北谷町・西谷町
山科区大塚元屋敷町・大岩

(『京都市遺跡地図台帳』平成十五年版より創建が平安遷都以前のものを抜粋)

北野廃寺跡

北区北野上白梅町



北野廃寺の寺域は北野白梅町の交叉点を中心に、約二百メートル四方と推定されています。現在北野白梅町交叉点の東北隅に、石標が立っています。

史跡

檜原廃寺跡

西京区檜原内垣外町



檜原廃寺八角塔基壇

檜原廃寺跡一帯は昭和四十六年に国の史跡に指定されました。その際、八角塔の基壇が復元され、周辺は公園として整備されました。

大宅廃寺跡 山科区大宅山田町



現在発掘地は大宅中学校の敷地となっており、石標が立っています。

法観寺 東山区八坂上町

「八坂の塔」で知られる法観寺は、聖徳太子の創建とも伝えられますが、遺物などから白鳳時代(七世紀後半)の創建と考えられています。古代八坂郷の渡来系豪族、八坂造が創建に関わったといわれています。現在、法観寺境内は京都市の史跡に指定されています。なお、「八坂の塔」(五重塔)は永享十二(一四四〇)年に再建されたもので、国の重要文化財に指定されています。

珍皇寺 東山区小松町

「六道詣り」で有名な珍皇寺の創建については諸説ありますが、出土した遺物などからは奈良時代の創建と推定されています。その後焼亡と再建を繰り返し現在に至っています。

広隆寺 右京区太秦蜂岡町

太秦広隆寺の創建ははっきりしませんが、その旧境内地からは飛鳥時代から平安時代にかけての瓦が出土しました。飛鳥時代には、すでにこの地に寺院が建てられていたものと思われます。

京都市考古資料館 上京区今出川通大宮東入

常設展示室の各時代ごとの遺物を紹介するコーナーに、北野廃寺出土の塑像仏や軒丸瓦、北白川廃寺塔跡のパネルなどが展示してあります。



平安京周辺古代寺院分布図